

2011年に刊行した『やさしく学ぶからだの発達』（全障研出版部）では、月齢を追った赤ちゃんの運動発達を述べました。おかげさまで、現場の先生方や保護者のみなさんに好評をいただき、版を重ねることができました。

前作では、赤ちゃんの「見たい」「聞きたい」「触りたい」という意欲が動きを活発にし、からだの軸をしっかりとらせ、たっぷり這った後、体幹も四肢の筋肉もしっかりさせることができ、歩行する力を一年かけて育てていく姿をわかりやすく明らかにしました。

本作は、全国障害者問題研究会の月刊誌『みんなのねがい』（2014年4月号）2015年3月号）に連載した「やさしく学ぶからだの発達」運動発達とつながる「食べる」と「遊ぶ」に加筆・修正を加え、一冊の本にまとめました。前回のからだの基本的な運動発達に加え、自分のからだ、空間の認識や視覚の発達と運動発達の関係、そして食べることやコミュニケーションがどのように運動発達と絡みながら進んでいくのかを説明していきます。発達につまづきのある子どもの支援を考えていくためにも、発達のすじみちを理解することが重要です。

今回は特に「食べる」と「遊ぶ」に注目します。育児書には「何ヵ月になったらこんな物を食べさせる」などと書いてありますが、食べる力は運動発達ととても関係しています。その子の運動発達のレベルと無関係に、月齢で離乳食を進めてしまうのは無理があります。子どもの食べる力が運動発達とどうつながって育っていくのかをみていきたいと思えます。また、遊びのレパトリーが運動発達とどうつながって広がっていくのかについても述べていきます。そして、現代は子どもが育つ上でどのような困難さがあるのか、などについても述べていきたいと思えます。

執筆者は、横浜リハビリテーションセンターを中心として働いているPT（理学療法士）、OT（作業療法士）たち。新しいメンバーも加え、抜群のチームプレイで子どもの育ち、「食べる」と「遊ぶ」をわかりやすく書いてくれています。

巻末には、前作同様、座談会も掲載しています。連載では深めきれなかった、障害をもつ子の「食べる」「遊ぶ」への配慮や、「やらせる」のではなく、子どもの意欲・育ちを保障していく上で大切にしてほしいことが語られています。

保育現場や子育てのなかで、本書がみなさんの力になることができれば幸いです。

2015年5月

林 万り